【史料紹介】

近代中国における写真の導入と広がり

湯城吉信

近代になり中国や日本に急速に流入した西洋の文明は、驚きの目でもって迎えられ、かつ急速に広まった。本稿では、その一例として、近代の中国人が写真について言及した史料を紹介したい。漢字は原文の字体（基本的に繁体字）を尊重し、句読点は現代中国語の標点を使用した。

「写真」（肖像製作最前線）（『聴雨叢談』巻八）　＊作者は同治六年（一八六七）に健在。

…粤東寫真，操西洋法，陰陽向背，用皴甚厚，遠望之一面突出紙上，頗得神理。近日海國又有用鏡照影，塗以藥水，鋪紙揭印，毛髪必具，宛然其人，其法甚祕，其製甚奇。

【大意】広東の肖像製作は、西洋の方法を操り、明暗や向きがはっきりし、皴の様子が極めて明確で、遠景も紙の上に浮き出たようで、まさに神業だ。最近、外国では、レンズで姿を写し、薬品を塗って、紙を敷き印刷し、髪の毛一本一本までもその人さながらに写し出すことができる。なんと神秘的な技術であることか。

【解説】『聴雨叢談』は、清末の福格（姓は馮、字は申之）著の筆記（『清代史料筆記叢刊』所収）。福格の詳しい事績は未詳だが、清朝の役人で、清朝の制度に詳し

かった。ここの記述を見ると、この頃、写真技術が香港の方から中国に入ったことがわかる。

【余説】「写真」という名称

日本語で言う写真は現代中国語では「照相（照片）」である。一方、「写真」という語は、「真を写す」という漢字からわかるように、もともとは「本当の様子を写す」という意味で、そこから「肖像」のことを指すようになった。

近代になって、日本や中国では西洋の事物を取り入れそれを漢字で表した。漢字は中国から日本に来たものだが、西洋の事物を表す漢字語は、日本人が作った（または当てた）漢字語が中国に渡ったものが多い（特に学問名）。ただ、「写真」のように両国で違う訳語が定着した場合もある。

「照相」（写真）（葛元煦『滬游雑記』巻二（一八七六年））

西人以薬水玻璃夾入横木匣内，匣面嵌小凹鏡，對人攝影于玻璃上。取出以沙水沖洗，即見人面，神氣部位*，無不逼肖。復以薬水製就紙片，覆於玻璃上，微照日色，則面貌衣痕、陳設物件現出*紙上。傳以顔色，勝似寫眞。近日華人得其傳，購薬水器具，開設照相樓，延及各省。惟兩旁有黑暈，一沾潮濕，色便晦黯，斯爲缺陷。以此法照各種字帖，收縮較蠅頭尤小，將顯微鏡觀之，絲毫不差。

【校勘記】○出　平原・夏曉紅編注『図像晩清』は「于」に誤る。

【大意】西洋人は、薬品をつけたガラスを横向きの木箱の中に差し込み、箱の一面にはめ込まれている小さい凹レンズを人に向けてガラスの上に像を写し取る。取り出して、薬品の水で洗うと、人の顔が現れるが、その様子は本物そっくりである。さらに、薬品で紙片を作り、ガラスの上にかぶせて、ちょっと日光に当てると、容貌から衣装、周りの家具まで、紙の上に出現する。色を着けると、肖像画に勝る。最近、中国人もこの技術を習得

し、薬品・器具を購入し、写真屋を開設し、各省に広まった。ただ、端が黒ずんでおり、ひとたび湿気にあたると、〔全体が〕黒くなってしまうことが欠点である。この技術で字帖を撮影すれば、蠅ほどの大きさに縮小しても、顕微鏡で見ると、全くそのままである。

【注】○神氣部位　明治十一年の堀直太郎訓点の和刻本では漢字の左に「ミメカタチ」（見目形）とルビがある。

【解説】葛元煦『滬游雑記』は、上海に十五年住んだ杭州出身の作者が、当時の上海の様子を記録した本である。

ここで紹介する写真技術は、「コロジオン法」であろう。写真の仕組みは古くから知られていたが、一八三九年、フランスのダゲールが像を化学的に焼き付ける方法を公表してから急速に発展した。一八五〇年、イギリスのフレデリック・スコット・アーチャーがコロジオンという物質を塗ったガラス盤を使用してネガを作るコロジオン法を発明し、一八七〇年頃まで主流になった。

なお、原文中の「撮影」「写真」は今の日本とは意味が違うので注意が必要である。また、「照相楼」には、明治十一年の和刻本では、漢字の左に「シャシンヤ」（写真屋）とルビがあり、当時の日本ですでに「写真屋」という職業が成立していたであろうことがわかる。（和刻本で、タイトルの「照相」の下にある「写真」という字は日本で追加されたもの。）

〔類話〕**「西人照像之法」（原題なし）**（王韜『瀛壖雑記』巻六（一八七五年））

西人照像之法，蓋即光學之一端，而亦參以化學。其法先爲穴櫃，藉日之光，攝影入鏡中。所用之藥，大抵不外乎硝磺、強水而已。一照即可留影於玻璃，久不脫落。精於術者，不獨眉目分晰，即纖悉之處，無不畢現。更能仿照書畫，字蹟逼真，宛成縮本。近時能於玻璃移於紙上，印千百幅，悉從此取給。新法又能以玻璃作印版，用墨搨出，無殊印書。其便捷之法，殆無以復加。法人如李閣郎，華人如羅元祐，皆在滬最先著名者。或云：近來格致

之學，漸悟攝影入鏡，可以不用日光，但聚空中電氣之光照之，更勝於日，故雖夜間，亦可爲之。技至此，疑其爲神矣！

【解説】王韜（一八二八～九七）は、『循環日報』を創刊し、中国ジャーナリズムの父とも称された。一八七九年に来日し、『扶桑遊記』を著した。この文章でも的確な状況描写力を発揮している（末尾は事実ではなかろうが）。

「波臣＊留影」（溺死体の撮影）（『点石斎画報』二集丑集（一八八八年一～三月））（線装本 26b-27a、大可堂版 4-240）

自萬年青輪船失事，而後蹈覆轍者屢見報章。撈獲尸身，雖招親屬認領，而或以路遠不能驟至，只得就地棺斂。其身無確証者，縱開具年貌籍貫，而領者猶不免有謂他人父、他人兄之慮。生前笑貌邈若山河，死後形骸難歸故土，誠可傷可慘，而莫可如何者。于是乎，香港東華醫院創為照尸留影之法，俾家人婦子得覩遺容，按圖索驥。間＊有面目腐爛不堪辨認者，仍就地掩埋，以妥幽魂。議既定，適有華洋火船遽遭不測，獲尸二百餘具，即以此法行之，而存歿之銜感者不可勝道。（閑章「維肖」）

【校勘記】○間　平原・夏曉紅編注『図像晩清』は「聞」に誤る。

【大意】万年青号＊事故以来、同様の事故は後を絶たない。死体を回収し家族に確認を要請しても、遠くてすぐには来られず、その地で埋葬することになる場合もある。確証が得られないものは、年齢、容貌、戸籍を明らかにしても、確認に来た者が他人だと言って引き取りを拒否する場合もある。生前の笑顔は二度と戻らず、死後の遺体も故郷に帰れない。何とも悲惨なことだが、どうする手だてもなかった。そこで、香港東華医院＊は、死体を撮影して残す方法を始めて、家族が遺体の様子を目にして、写真により確実に本人確認ができるようにした。すでに死体が腐って識別不能になっているものがあ

図１　「波臣留影」（溺死体の撮影）（『点石斎画報』丑集、大可堂版 4-240）

れば、その場で埋葬して霊魂を弔うことになった。以上の議論が確定した後、ちょうど華洋蒸気船が遭難し、死体二百体余りが回収されたので、さっそくこの方法を実施すると、生者死者ともに感激する者は数知れなかったという。（「ただただそっくり」〈成語「維妙維肖」〉）

【注】○波臣　溺死した人（土左衛門）。○万年青号　一八六九年、福州船政局が作った最初の軍艦。一八八七年、英国船に衝突されて沈没し、七〇余名が死亡し、賠償問題が起きた（『清史稿』「志一百十一・兵七」、『点石斎画報』一集壬集（一八八七年四月頃？）「万年青勝」参照。）

「萬年青勝」

去臘月二十六日，我萬年青船為你包而公司撞沈。勢不得不入訟。訟之而竟得直。滬上諸日報論之詳且盡，無俟僕贅言。然試思所以勝之者，未嘗無故也。從前中國積弱久，歐西人協以謀我，故難間。近則自强之機日起而有功，而西人以争利故，各國猜忌，不似從前之見好，事異而勢殊。故得所藉手，以告成功。若事在十年前，想未必如此之大公無我也。然而英

已加人一等矣。（閑章「直道猶存」）

【大意】去年の十二月二十六日、我が万年青号はネパール社（中国名：京申公司）に衝突され沈没した。これでは訴訟せざるを得まい。訴訟の結果、賠償金を勝ち取った。上海の各新聞は詳細に報じているので、ここで贅言する必要はなかろう。ただ、故なきことではないので、ここで試みに勝訴となった理由を分析したい。以前、中国人は脆弱で、西洋人は共謀していたので、間に割って入ることができなかった。近頃は、自強策の機運が高まり効果も上がり、一方、西洋人は利益を争って仲たがいし以前のように共謀できなくなり、情勢が変わった。そういう状況に助けられて、成功を収めることができたのだ。もし、十年前であれば、このように公正な結果は得られなかったであろう。しかし、英国はすでに中国より優位にある〔状況は変わらない〕。（「直き道はまだ失われていない」＜『論語』衛霊公篇「三代之所以直道而行」）

○香港東華医院　一八七二年創設された香港初の一般向け病院で、慈善活動を盛んに行った。○按圖索驥　もともと「図によって名馬を求める」。確かな資料があり求めやすいことを言う。

【解説】『点石斎画報（點石齋畫報）』は、上海の有名新聞『申報』の附録（別冊）として一八八四年五月八日から一八九八年八月十三日まで毎月およそ三回ずつ発行された絵入り新聞である。時事問題や巷の噂など幅広く扱い、当時の世相を知ることができる貴重な史料である。本文末尾に印章の形で一言が添えられている（閑章）。この部分では、写真が遺体確認にも使われていたというのは興味深い。ちなみに、『申報』一八八七年一月二十九日（第四面）の「碰船続述」という記事によれば、死体の写真はお棺の蓋に貼ったようだ。（「…精於照相者，將屍各照一相，棺殮之後，糊其相於棺面以便家屬閱照領屍，特不知果能面目分明不致腐爛否也。…」）なお、この部分は、中野美代子、武田雅哉『世紀末中国のかわら版』でも紹介されている。

「映照誌奇」（写真の不思議）（『点石斎画報』五集貞集（一八九八年六、七月？））（線装本 57b-58a、大可堂版 15-173）

図２　「映照誌奇」（写真の不思議）（『点石斎画報』貞集、大可堂版 15-173）

自泰西照相之術盛行於中國，不論人物、草木、樓臺、殿閣，皆可儘納於尺幅之中，纖毫畢現，蓋*其究心於光學也精矣。德藩亨利之入覲　龍光也，恭遣隨從人員携帶照相器具，將　聖明接待外臣秀*裳端拱之容，攝成一圖*，以昭瞻*仰而示寵榮。他如臨天、地壇及遊歷西山名勝，均映成照片，朗若列眉。惟照國子監大成殿時，初拍迷漫不清，祇見白氣一團；再拍，則變爲黑氣，仍一無所覩。德藩異之，遂作罷論。時慶邸、李中堂、張侍郎等在旁陪從，皆莫明*其故，亦可異也。（閑章「風景全非」）

【校勘記】○蓋　平原・夏曉紅編注『図像晩清』はなし。○秀　平原・夏曉紅編注『図像晩清』、『点石斎画報全文校点』はともに「垂」とするが「秀」の行書体だと考えて改めた。○圖　平原・夏曉紅編注『図像晩清』は「幀」に誤る。○瞻　同上書は「時」に誤る。○明　同上書は「名」に誤る。

【大意】西洋の写真技術が中国で盛んになってから、人物、草木、建築物など、すべてのものを小さな紙の中に

収め、細部まですべて表現できるようになった。光学を究め精微を尽くしたものであろう。ドイツのハインリヒ王子が皇帝に謁見した時、随従の者に撮影機材を持たせ、清朝の外交大臣の立派な衣装や礼儀を一幅にまとめ、偉容を明らかにし栄誉を公にした。さらに、天壇、地壇に行き、西山の名勝を遊歴し、すべてを写真にして、その姿を手に取る如く明らかにした。ただ、国子監・、大成殿・を写した時は、一回目は、ただぼんやりと白煙のかたまりが見えるだけで、二回目も、それが黒煙になっただけで、やはり何も見えなかった。ドイツもこれを異なこと（ただ事ではない）とし、それ以上は撮影しなかった。その時、慶邸・、李中堂・、張侍郎・などの随従の者も誰もその理由がわからなかったのは、はたまた異なことだと言えよう。（「風景全変」＜成語「面目全非」）

【注】○一八九八年（戊戌の変法の年）三月二十五日（西暦五月十五日）、ドイツのハインリヒ親王が光緒帝に謁見したこと。（『清史稿』「本紀二四・徳宗本紀二」、「志六六・礼十・藩国通礼」、「志一三二・邦交五・徳意志」参照。）○国子監　中国の近代以前の最高学府。○大成殿　国子監に隣接する孔子廟の正殿。おそらく「国子監の大成殿」と誤っているのであろう。図2の絵も実物通りではない。○慶邸　慶親王（愛新覚羅奕劻（えききょう））（一八三八～一九一七）のこと。皇族出身の大臣。一八八四年、総理各国事務衙門大臣となり、外交を司った。ハインリヒとの謁見の際も立ち会っている（謁見の様子は『清史稿』志六十六に詳しい。）○李中堂　李鴻章のこと。○張侍郎　張蔭桓（一八三七～一九〇〇）のこと。当時は総理衙門大臣であった。戊戌新政を積極的に推進したが、戊戌政変後は新疆に流されやがて殺害された。

【解説】清朝の中国では、外国人が皇帝と面会する場合、三跪九叩頭の臣下の礼を要求され外交問題となっていた（儀礼問題）。それに対して、改革派であった光緒帝は、一八九一年、外国大使との面会を実現し、以後謁見が定着する（この年、光緒帝は英語を学び始めている）。こ

このドイツ親王の謁見もその延長上に位置する。そこに写真が登場しているのも興味深い（光緒帝は大の写真好きであったと言われる）。が、一方、この記事を見ると、中国の伝統に神聖さを求める世相もあったことが窺える（あるいは、穿った見方をすれば、間もなく光緒帝を幽閉し改革を頓挫させる西太后を中心とする保守派の怨念が邪魔したと言えるかもしれない）。

「照像盛行」（原題なし）（蘭陵憂患生『京華百二竹枝詞』（一九〇九年）（『清代北京竹枝詞十三種』所収））

明鏡中嵌半身像，門前高掛任人觀。各家都有當行物，花界名流大老官。

照像盛行，各舘林立。門前高掛放大像鏡，或爲政界偉人，或爲花叢名妓，任人觀覽，以廣招徠。

【大意】ガラスの中の半身像。店先に揚げ皆が見る。店ごとそれぞれ目玉あり。花街の名妓、政界の大御所。

写真が流行し、写真館が林立している。店先には、あるいは政界のお偉方、あるいは花柳界の名妓と、大きなガラスの肖像を掲げ、誰もが見られるようにし、広く客を集めている。

【解説】これは、当時の北京の俗謡を集めた本。この部分では、写真が流行し、盛んに商売が行われた様子が歌で生き生きと描写されている。

参考文献（登場順）

福格『聽雨叢談』（中華書局〈清代史料筆記叢刊〉、一九八四年）
王韜『瀛壖雜記』（一八七五年）（『小方壺斎輿地叢鈔』（杭州古籍書店、一九八五年。原版は、上海著易堂、光緒丁卯（一八七七？）序、辛卯（一九〇一）題字）九帙巻四十三所収。）
クエンティン・バジャック『写真の歴史』（創元社〈知の再発見双書109〉、二〇〇三年）
飯沢耕太郎監修『カラー版世界写真史』（美術出版社、二〇〇四年）
葛元煦『滬游雜記』（一八七六年）（『和刻本漢籍随筆集』第十

四集（汲古書院、一九七七年）所収。）
陳平原・夏曉紅編注『図像晩清』（百花文芸出版社、二〇〇一年）
『点石斎画報』（線装本）
＊一八九七年（丁酉）から、縮刷本（線装本）が出版された。一八八三年、広東人民出版社がその影印本（線装本）を複製出版している。Yale University Digital Collection（イエール大学デジタルコレクション）で画像が提供されている。
『点石斎画報』上下（上海文芸出版社〈中国古典精品影印集成〉、一九九八年）＊影印を載せるが、すべてを紹介しているわけではない（二七〇〇点余）。
『点石斎画報』〈大可堂版〉全十五冊（上海画報出版社、一九九八年）
＊全四千点以上（四六六六点？）を紹介する。
葉漢明、蔣英豪、黄永松校点『点石斎画報全文校点』（商務印書館、二〇一四年）
葉漢明、蔣英豪、黄永松『点石斎画報通検』（商務印書館、二〇一四年）
中野美代子、武田雅哉『世紀末中国のかわら版』（中公新書、一九九九年）＊原版は一九八九年、福武書店刊。武田雅哉氏の解説が詳しい。八十二点を紹介する。
『申報』〈影印本〉（上海書店、一九八三年～）
帆刈浩之「香港東華醫院と廣東人ネットワーク―二十世紀初頭における救災活動を中心に」（『東洋史研究』五五―一、東洋史研究会（京都大学）、一九九六年）
山田辰雄編『現代中国人名辞典』（霞山会、一九九五年）
孔祥吉、林田雄二郎『清末中国と日本―宮廷・変法・革命』（研文出版、二〇一一年）
王開璽『晩清政治新論』（商務印書館〈北京師範大学史学文庫〉、二〇〇六年）第四章「中外礼儀之争与跪拝礼儀的廃除」
王洪運「論外国公使覲見清帝制度的確立」（『四川師範大学学報（社会科学版）』一九九九―三）
手代木有児『清末の西洋体験と文明観』（汲古書院、二〇一三年）
唐文治『茹經堂文集』（上海書店〈民国叢書〉、第五輯九四、一九九六年）＊巻六「記和碩慶親王事」
陳乃乾編『清代碑伝文通検』（中華書局、一九五九年）
『清史稿辞典』（山東教育出版社、二〇〇八年）
『中国大百科全書』（中国大百科全書出版社、二〇〇九年）
蘭陵憂患生『京華百二竹枝詞』（一九〇九年）（路工編『清代北京竹枝詞十三種』（北京古籍出版社、一九八二年。原版は、北京出版社、一九六二年刊）所収。）